

国際会議  
報告技術と障害者に関する国際会議 (CSUN)  
参加報告

国立特殊教育総合研究所 / ウィスコンシン大学 渡辺 哲也

ヒューマンインタフェースの応用分野の1つである障害者支援をテーマとした国際会議がアメリカで毎年3月に開催されている。「CSUN」という名称で知られるこの会議は、正式には「技術と障害者に関する国際会議」という。主催者はカリフォルニア州立大学ノースリッジ校障害者センター (The Center on Disabilities at California State University, Northridge) で、CSUNは大学名の略称である。2004年で19回目となるこの会議は、ロサンゼルス空港に近い2つのホテルを会場として、3月15日から20日まで6日間の会期で開催された。

最初の2日間には、支援技術やアクセシビリティに関するワークショップが開かれた。その数は両日とも10講座で合計20講座、本会議とは別途に受講料が必要である。筆者は「508条に従ってWebアクセシビリティを実現する」に参加した。参加者はざっと見積もって50人以上、視覚障害者も数多く見受けた。受講者はまずWeb音声化ソフト (IBM Home Page Reader) の主要なキー操作の説明を受ける。次に画面を消して情報検索を行う疑似障害体験により、Webアクセシビリティとは何かを具体的に理解することになる。続けて、リハビリテーション法第508条の詳細項目が提示され、これを実現するためにHTMLファイルの悪い例を書き換え、修正結果を音声で聞いて確かめることを繰り返す。講義と実習を交互に行うことで、知識だけでなく実践技術も身につくように構成されていた。

本会議となる後半の4日間は、一般セッションと企業 (団体も含む) 展示からなる。1時間または30分のセッションが16の会場で同時進行する (このため、興味あるセッションが同じ時間帯に重なることも多かった)。セッションの雰囲気や進め方は、学会の研究発表とは異なっていた。学会のような緊張感は薄く、講演者と聴講者が一体となって会合を楽しんでいる様子だった。また、学会ではすべての講演の後に質問時間となるが、この会議では質問は随時なされていた。セッション進行中に会場に出入りする人も多かった。

セッションでは、最先端の技術開発より実用段階の話題が数多く紹介された。VBAを使ったアクセシビリティの向上や、パワーポイントファイルからアクセシブルなHTMLファイルを生成するウィザードの開発などは、障害者やその支援者にとって即役に立つ有益な内容である。技術開発のほかに、支援技術導入に関わる教育・雇用・福祉の制度が話題となるのもこの会議の特徴だろう。本年は、州や大学におけるWebアクセシビリティの実践例と問題の話題が多かった。支援技術メーカーが新しい製品や機能をデモするセッションもあり、新しい話題ではMac OS X次期バージョンのアクセシビリティ機能の強化が興味を引いた。Windows環境と比べて機能面での新規性は乏しいが、画面読み上げと画面拡大機能をOSに標準装備する点

は注目に値する。

会議参加者への情報保障は、点字・拡大文字・FD (テキストファイル)・CD録音図書・リアルタイム字幕サービス (写真は速記タイプライタ)・補聴器の用意がプログラムに明記されていた。実際の会場では、盲ろう者に触手話通訳をしている様子も見かけた。

この会議の最も大きな見所は支援技術の展示だろう。ホテルの大広間4室と小広間1室に177もの展示ブースが並び、製品で分類すると、視覚障害 (全盲/ロービジョン) 関連が63社で最も多い。筆者が興味深く見たのは、触図・タッチパッド・音声を組み合わせた試験教材、オンラインで触図を注文できるシステムなどである。2番目に多いのは代替・拡大コミュニケーションで29社、3番目は代替入力/キーボード装置で23社、そして教育ソフト22社、学習障害20社と続く。会場には、白杖を持ったり、盲導犬とともに歩いたり、車いすに乗るなど外観でそれとわかる障害者も随所で見受けた (写真)。

主催者の説明によると参加者数は40ヶ国から4000人以上らしい。最新の実用的情報を得たり、支援技術に対する利用者の期待・熱意を感じてみるには是非1度参加することをお勧めする。最後に、会場の1つホテルマリオットは障害者を積極的に雇用していることを付記しておく。



展示会場の様子



速記タイプライタ